佐賀大学農学部同窓会報　第７号

ありあけ

●発行日　2010年12月１日
●編　集　会報編集委員会
●発　行　佐賀大学農学部同窓会
住所　佐賀市本庄町１　佐賀大学内
TEL 0952-23-1253　FAX 0952-25-5700
E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp
ホームページ　http://dousou.saga-u.ac.jp/

農学部公開シンポジウム
～佐賀の特産物～

平成22年６月12日、農学部大講義室にて「ゲノム情報から生みだそう。佐賀の特産物」と題したシンポジウムが開催された。農学部の松本教授、谷本教授、永尾准教授、辻准教授が、佐賀特産野菜の機能性成分、ミカンの品種改良、シチメンソウ、農業版 MOT について熱弁を振るわれた。

目　次

・農学部公開シンポジウム
～佐賀の特産物～……Ｐ１
・平成21年度事業報告及び収支決算……Ｐ２
・平成22年度事業計画及び収支予算……Ｐ３
・研究室紹介……Ｐ４
（生物環境科学科 生物環境保全学コース 地圏環境学 研究室）
・会員の広場……Ｐ５～７
佐大への提言（Ｖ）　平山　伸
・会員の情報（博士号取得）……Ｐ７
牧角啓一
・支部だより……Ｐ８～10
佐賀県支部、佐賀県庁支部、佐賀県教職員支部、
熊本県庁支部、73Ａ農園会、東京支部、大分支部

平成21年度事業報告及び収支決算

事業報告

次の事業を実施し、円滑な同窓会活動に努めました。

(1)　大学と同窓会との意見交換会の開催。
(2)　会報「ありあけ」４、５号を発行・配布。
(3)　大学主催のキャリアデザイン講座や就職ガイダンスの講師として会員を派遣。
(4)　会員の住所等異動状況調査の実施。
(5)　農学部・全学同窓会支部への支援活動。

収支決算

(1)　一般会計

〔収入〕（H21.４.１～H22.３.31）　　**単位：円**

科　目		21年度実績	摘　　要
前年度繰越金		1,066,756	
会　費		7,140,000	
	学生(新入生)	3,564,000	入会金（H21）162名×２千円＝　324,000円 会　費（H21）162名×２万円＝3,240,000円
	一般会員	3,576,000	年会費　３年分　139名×６千円＝834,000円 ２年分　111名×４千円＝444,000円 １年分　54名×２千円＝108,000円 合計　1,386,000円 終身会費　68名×３万円＝2,040,000円 終身会費　10名×1.5万円＝150,000円
雑　収　入		50,845	寄附金５万円（故　小池勝氏）、預金利息
特別会計戻入		0	会費収入増などのため取り崩しなし。
計		8,257,601	

〔支出〕（H21.４.１～H22.３.31）　　**単位：円**

科　目		21年度実績	摘　　要
事　務　費		777,758	総会案内、各支部総会等出席、賃金など
会　議　費		236,515	総会資料代、役員会経費
事　業　費		1,169,057	＊会報印刷代・送料など（5,300部、5,100部）610,221円 ＊キャリア講師旅費　61,087円 ＊会費納入促進（手数料・トナーなど）51,037円 ＊就職ガイダンス講師旅費・講師料など30,300円 ＊同窓会長賞表彰　０円 ＊大学との意見交換会　102,492円 ＊名簿管理　313,920円
組織強化費		128,640	各支部総会等出席時の御祝　70,000円 支部助成金（佐賀県庁支部、佐賀県支部）58,640円
全学同窓会負担金		2,138,400	新入生入会金・会費の60% 162名（H21年）×（２千円＋20千円）×60%＝2,138,400円
特別会計への繰出金		2,271,000	
	新入生入会金	81,000	新入生入会金　162名×500円＝81,000円
	会費平準化準備金	2,190,000	終身会費（78名分）30,000×68名、15,000×10名
予　備　費		20,000	エコアクション学生シンポジウム支援
計		6,741,370	

〔差引残〕

（収入）8,257,601円－（支出）6,741,370円＝
1,516,231円（次年度繰越金）

(2)　特別会計（H21.４.１～H22.３.31）　　単位：円

科　目	21年度実績	摘　　要
前年度繰越金	11,873,404	
入　会　金	81,000	新入生入会金 （H21；162名）×500円＝81,000円
会費平準化準備金	2,190,000	一般会計より繰り入れ（終身会費相当額） 30,000円×68名　15,000円×10名
雑　収　入	12,436	預金利息
計	14,156,840	

※支出はなく全額次年度へ繰越

監査報告

平成21年度分の会計監査を実施したところ、会計諸帳簿及び証拠書類、預金通帳等いずれも適切に処理されていたことを認めます。

平成22年６月12日
監事　江頭　俊雄
監事　森田　　昭

平成22年度事業計画及び収支予算

事業計画

同窓会活動の活性化を図るため、会報の発行による情報提供や、意見交換会の開催など大学と連携した取組みを行います。

⑴　大学と同窓会との第３回意見交換会の開催。
⑵　会報「ありあけ」（６号、７号）の発行・配布。
⑶　同窓会支部活動に対する助成。
⑷　農業技術経営管理士（農業版 MOT)養成の取組への協力支援。
⑸　キャリアデザイン講座等への会員派遣。

収支予算

⑴　一般会計

〔収入〕（H22.４.１～H23.３.31）　　単位：円

科　目	22年度予算	摘　要
前年度繰越金	1,516,231	
会　費	4,686,000	
学生(新入生)	3,586,000	入会金 （H22；163名）×２千円＝　326,000円 会費 （H22；163名）×２万円＝3,260,000円
一般会員	1,100,000	年会費　延100名・年×２千円＝200,000円 終身会費　　30名×３万円＝900,000円
雑　収　入	1,169	預金利息
特別会計戻入	0	
計	6,203,400	

〔支出〕（H22.４.１～H23.３.31）　　単位：円

科　目	22年度予算	摘　要
事　務　費	990,000	
会　議　費	420,000	
事　業　費	972,000	＊会報印刷代など（2,500、5,500部）400,000円 ＊キャリア講師旅費　90,000円 ＊会費納入促進（手数料・トナーなど）62,000円 ＊就職ガイダンス講師旅費・講師料など50,000円 ＊同窓会長賞表彰　50,000円 ＊大学との意見交換会　120,000円 ＊農業版 MOT 関係現地研修等経費200,000円
組織強化費	360,000	各支部総会等出席時の御祝　120,000円 支部助成金　240,000円
全学同窓会負担金	2,151,600	新入生入会金・会費の60% 163名×（２千円＋20千円）＝60%＝2,151,600円
特別会計への繰出金	981,500	
学生入会金	81,500	新入生入会金　163名×500円＝81,500円
会費平準化準備金	900,000	会費平準化準備金（終身会費30名分）
予　備　費	328,300円	
計	6,203,400円	

⑵　特別会計

〔収入〕（H22.４.１～H23.３.31）　　単位：円

科　目	22年度予算(B)	摘　要
前年度繰越金	14,156,840	
入　会　金c	81,500	新入生入会金 （H22；163名）×500円＝81,500円
会費平準化準備金d	900,000	終身会費　30名×３万円＝900,000円
雑　収　入e	3,634	預金利息
計	15,141,974	

※支出はなく全額次年度へ繰越

農学部同窓会役員　（H22・23年度）

役職	担当	氏名	卒年・学科(専攻)	勤務先
会長		金丸　安隆	S43・農学(畜産)	
副会長		杉町　信幸	S51・農土(土改)	鳥栖農林事務所
副会長		有馬　進	S52・農学(農経)	佐大農学部(生物環境)
理事長		緒方　和裕	S55・農学(病理)	農業試験研究センター
理事(16名)	６名	白武　義治	S51・農学(農経)	佐大農学部(生物環境)
		光富　勝	S51・農化(食品)	佐大農学部(生命機能)
		吉賀　豊司	H２・園芸(応動)	佐大農学部(応用生物)
		田中　宗浩	H４・生生(施設)	佐大農学部(生物環境)
		郡山　益実	H７・生生(浅海)	佐大農学部(生物環境)
		宮本　英揮	H10・生生(水利)	佐大農学部(生物環境)
	３名	稲田　稔	H１・農学(病理)	農業試験研究センター
		川路　勝	H３・農土(土改)	佐賀中部農林事務所
		谷口　宏樹	H４・生生(作物)	農業試験研究センター
	１名	福田　徳之	H１・農学(農経)	ＪＡ佐賀中央会
	１名	外戸口良文	S61・農土(干拓)	佐賀農業高校
	１名	福田　喜隆	S63・農土(土改)	佐賀市議会事務局
	４名	古川　辰馬	S40・農学(育種)	
		大久保清海	S41・農学(園芸)	
		村岡　実	S46・農学(保護)	
		牛草　寛志	S46・農土(干拓)	
監事		山口　郁雄	S52・農学(農経)	高志館高校
		溝口　善紀	S53・農学(病理)	佐賀中部農林事務所

佐賀県庁支部長	森田　昭	S52・農学(農経)	唐津農林事務所
佐賀県教職員支部長	水田　和彦	S51・農土(農機)	佐賀農業高校
佐賀県農協連支部長	鐘ヶ江直雅	S56・農化(生化)	ＪＡ佐賀中央会
熊本県支部長	大田黒慎一	S50・園芸(果樹)	熊本県農業研究センター
農業自営者の会長	山田　和由	S49・農学(農経)	農業自営
佐賀県支部長	加々良光彦	S37・農学(農土)	

シリーズ⑥
研究室紹介

生物環境科学科 生物環境保全学コース 地圏環境学 研究室

本研究室は、半田　駿教授、大西　晴夫特任講師、そして私、長　裕幸（教授）の３名で構成されています。半田先生は24年３月に定年で、大西先生は23年９月に任期満了でそれぞれご退職の予定です。学生は、現在、修士２年生１名、修士１年生１名、学部４年生６名、学部３年生９名が在籍しています。その他、短期で１名のインドネシアからの訪問教授が滞在しています。

本研究室での研究内容は先生毎に異なります。半田先生、大西先生は、もともと京都大学地球物理学科ご出身の同級生なのですが、半田先生は、地中深くの構造を解明すべく、電磁気を用いた地下探査が専門であるのに対し、大西先生は気象庁地球環境・海洋部長を退職後に赴任されてこられた気象学のスペシャリストであり、地球環境と台風が専門といったように、その対象とする領域は全く異っています。然るに私、長は農業工学出身で土壌物理学が専門であり、作物の生育範囲である土壌表層部における根群域から、作物の蒸発散に影響を与える地上５ｍ程度を対象領域とした水循環を中心に研究しており、先の両先生方の中間の領域を受け持っているといったところでしょうか。

物理嫌いの学生が多数を占める農学部においては異端の研究室かも知れませんが、学生にとって、自然の現象を観測し、計測したデータを理論的に解析していく過程は全てのサイエンスに共通しており、理論の部分を理解するのに多少時間がかかるというハンディはありますが、農学部において十分に存在価値を発揮できる分野であると思います。

就職先は、国家公務員、地方公務員、大学院への進学、環境分析関連会社、食品関連会社、JA 等々多岐にわたっています。ご先輩方には、後輩の学生がいろいろとお世話になると思いますが、どうぞ温かい目で見守って下さるようお願い申し上げます。

長が観測を行った中国黄河流域のトウモロコシ畑

大西先生の代表的著書、「台風の科学」

半田先生、「三重津海軍所」跡での地中レーダー探査。
背景は凌風丸の模型

会員の広場

佐大への提言（Ⅴ）

横浜市　平山　　伸
（Ｓ60年卒・生物化学）

佐大の更なる活性化のため外から見た佐大について感じたことを紹介する場として寄稿させて頂いているが、今後の佐大発展に向け一つでも寄与できれば幸いである。

⑴　海洋エネルギー・資源研究所への拡充

佐大海洋エネルギー研究センターは国立大学86校の内、約20校に設置されていた全国共同利用施設であったが、この仕組みが2010年度より省令化と共に変わり、共同利用・共同研究拠点として約25校に設置されたうちの一つとなっている。

一方、政府の「成長戦略実行計画（工程表）」において、「海洋資源、海洋再生可能エネルギー等の開発・普及の推進」が2010年６月に盛り込まれ、これに対応する形として「国土交通省の成長戦略」の「海底資源エネルギー確保戦略、および海洋再生可能エネルギー戦略」において海洋温度差発電や波力発電の活動拠点の整備が謳われている。更に、経産省の2011年度予算においても海洋温度差発電等の海洋エネルギー予算が盛り込まれた。これらのことは、小泉内閣時の総合科学技術会議で重点拠点に選定された佐大海洋エネルギー研究センターにとっては、拡充の好機といえよう。少なくとも、佐大内の中長期計画の視点だけではなく、国の長期戦略の観点から大学幹部のリーダーシップの下に「海洋エネルギー研究センター」から「海洋エネルギー・資源研究所（仮称）」への拡充案を政府や各省へ PR してはと考えるものである。更に、海洋エネルギー資源利用推進機構と再生可能エネルギー協議会が合同で2010年７月に「海洋エネルギー資源国際フォーラム」を横浜で開催し国内外の海洋エネルギーや海洋資源研究開発動向の発表会が盛況に行われたことは世間の注目度が急速に高まっているといえよう。なお、海洋エネルギー資源利用推進機構の事務局は、佐大海洋エネ研内にあり、国内外の海洋エネルギー・資源の情報収集拠点としても認知されていることは追い風である。

一方、この数年、食糧と競合しないエネルギー・有用資源として海藻やプランクトンが再び注目されており、2010年４月28日のフジサンケイビジネスアイによれば筑波大学では企業とコンソーシアムを組み、油（燃料油）を生産する微細藻類の培養生産設備を15億円で建設中である。これら動向から実用化には海水や海面利用がキーとなるが、佐賀新聞社刊「佐賀を日本一元気にする本、押田　努　著」によれば佐大海洋エネ研が立地する伊万里湾は漁業権が消滅した稀有な場所でもあるため、プランクトンや海藻資源の基礎及び実証研究地としても期待が大きい。更に、佐賀県にクリークが存在することは、淡水、汽水、海水と多様な環境が形成されていることを意味し、多様な藻類の生存が容易に期待され、これらの利用化研究が皆無に近いことは、佐大の研究分野を育てる意味からも重要な検討要素といえよう。これらの実現には、これまで蓄積してきた技術との融合による佐大への必然性のシナリオを構築することが急務であるが、海洋エネ研の母体となった機械系人員の知恵だけではなく多様なジャンルとの意見交換をすれば知恵出しは容易であろう。なお、かつて化学工学会編集委員にて、海洋利用技術の最新動向として「海洋エネルギーの開発、および海洋の資源・バイオマス生産」について化学工学2007年５、６月号にて小特集を企画したことがあり、本稿に関し更に興味を示された方は参照にされたい。

上記動向から医学部を持つ中規模総合大学として、研究センターを数多く所有し、かつ、研究所を設立することは大学の個性化に直結すると考えられ、また、熊本大学発生医学研究センターが発足10年目で研究所になったことは拡充条件の参考になろう。いずれにせよ研究施設の充実は大学のステイタス UP にも繋がっていくため、佐大の戦略的検討課題として取り上げられることを願うばかりである。

⑵　シンボル地域での水浄化技術の PR

水の都佐賀を観光名所に仕立てていくには、クリークや佐賀城お堀の水の浄化が必要である。かつて多布施川や佐賀城のお堀を船で遊覧する体験が実施されたことが各方面で報道され、最近でもお堀の遊覧船が復活している。特に地域と共に発展する大学を目指す佐大にとって、佐大で技術開発された水浄化技術を集約し、浄化モデル地域の水を徹底的に浄化し大学の技術力 PR 拠点としてはと考える。

設置場所としてはシンボル的な場所を選定し技術力 PR 効果を狙うのがよい。例えば、佐賀城のお堀、松原川、どん３の森周囲のクリーク、諫早湾干拓からの排水等が想定される。特に、佐賀城下ひなまつりで流し雛が行われる松原川や諫早湾干拓地の排水浄化等を実現できれば、地域へのインパクトは大き

いものと推測される。これらの取組みによって水の都・佐賀に対し技術的にも貢献する地元大学としての認知度が上がっていくことを願うばかりである。

⑶　スポーツ選手強化による広報力の強化

近年、各地の国立大学でスポーツ選手が育成され、大きな大会で活躍する姿がTV等で報じられることは大学にとって大きなPR力になっている。佐大では陣内選手が女子800mに日本代表として国際陸上や日本選手権に出場したことが記憶に新しい。

国立大学でのスポーツ選手育成では、筑波大学や鹿屋体育大学にスポーツ系専門学部があるため多くの選手を輩出していることは周知の事実であるが、注目したいのは福島大学である。近年福島大学では多くの各種陸上競技の日本代表選手を輩出しているが、大きな体育専門学部を持たない地方に存在する国立大学が日本を代表する選手を多く輩出している拠点になっていることは興味深い。福島大学が何故にこのようにスポーツ選手を多く輩出してきたかを分析することは佐大でのスポーツ選手育成によるPR力強化の参考になろう。ちなみに福島大学では、シドニー大学の研究を元に、ACTN遺伝子による運動適用性の解析を選手個々人に実践しており、TT型遺伝子は疲れにくく持久力が高い、CC型は速く走る筋肉が多いということが実証されつつある。このような医学的知見を取入れつつ、スポーツ選手の能力を効率的に強化していく計画立案と検証を、文化教育学部、医学部、理工学部等の学部横断プロジェクトとして企画しては如何だろうか。

⑷　天文台の整備

佐大本庄キャンパスを歩いていると他の大学で目に付く天文設備が見受けられない。外部に見えない位置にあるのかは不明であるが、大学の天文設備の充実は大学のファン層獲得に重要な要素といえよう。

最近の他大学の動きとして宇都宮大学が口径40㎝の主望遠鏡等を設置し昼夜問わず観察を可能としたことが2010年４月28日の日刊工業新聞で大きく報じられた。これはリニューアルされた事例とのことであるが、地元小中学校への教育支援活動にも活用され、ネットを通じて学外へも観察経過が配信されている。また、鹿児島大学には口径１ｍの赤外線望遠鏡が設置されており、研究用途の活用事例として興味が注がれる。更に、2010年５月10日の佐賀新聞によれば、佐賀天文協会が佐賀県太良町に口径60㎝の望遠鏡を中古で百数十万円にて設置したようで、安価な導入事例として参考になろう。

いずれにせよ天文ファンは確実に居り、その設備が大学で充実されることは、佐大ファンを増やす一手段になりえると考えられ、同窓会を含め支援を検討しては如何だろうか。

⑸　日本庭園設置による日本文化習得拠点の整備

佐賀大学憲章には魅力ある大学との記載があるが、以前出張に出向いたカナダバンクーバーのブリティッシュコロンビア大学（UBC）の魅力あるキャンパス整備の事例を紹介したい。UBCには新渡戸稲造を顕彰して造られた日本庭園がある。現物を直に観ることはできなかったが、日本文化を伝える拠点として知られている点は広報的にも参考になろう。そこで、佐賀市神野公園の隔林亭（添付写真参照）のような藁葺き屋根と日本庭園を造成し、留学生の日本文化の交流拠点として活用してはと考える。茶道、華道、雅楽等の活動や佐賀城下雛祭りの拠点としても活用し、地域と共に歩む大学のシンボル拠点とすることが想定される。国立大学で藁葺き屋根の建築物は無いものと予想され、この周囲に蓮池や水路、日本庭園を配置することでより一層の趣が演出され大学の名所にもなりえるものと考えられる。また、これらにより、絵を描きたくなる場所としても認知が進み、市民が本庄キャンパスに集う誘引力になろう。留学生支援の一環として、同窓会の支援も検討されては如何だろうか。

⑹　空洞化した佐賀市旧商店街の活性化寄与戦略

各地の商店街の空洞化が大きな社会問題となっているが、佐賀新聞社によれば佐賀市内の旧商店街の通行人数は1985年と比べ約１／５になっており（2008年９月６日同新聞記事）、空き店舗率は佐賀市で23%、中でも呉服町商店街に限れば42%に達するとのことである（同新聞2010年８月29日記事）。筆者が各地を回った経験を加味しても、県庁所在地において佐賀市の空洞化は恐らく全国ワースト３に入ると思わ

れる。

これに対し佐大では「まち作りサテライト：ゆっつらーと館」を設置され、様々なイベントが開催されている。他にも文化教育学部美術工芸課程による美術・芸術品の展示会や都市工学科による空き店舗を学生の住まいと集会所にする取組み、経済学部地域経済研究センターによる井徳屋での地域物産や留学生作品の販売等が行われている。視点としては定住的な要素を含む策が望まれるが、その一つの候補として佐大から設立されたベンチャー企業や佐大OBが社長を務める大手企業の支店を大学がエスコートして中心街に集約し、ビジネス拠点として活用できないか検討しては如何だろうか。企業側の利点としては、佐大を核に技術的に密度の高い異業種交流ができること、地理的にも佐賀駅や佐賀空港に近く各地の出張へも容易であること、家賃も安価であること、大学主導の仕掛けであることによる大きな宣伝効果が得られること等が挙げられる。特に、この中で上記候補企業の把握と呼びかけについては同窓会のネットワークと経済学部地域経済研究センターを核に情報収集していくことが実現のキーになるものと考えられ、同窓会主体に検討されては如何だろうか。

これまで５回に渡り提言をさせて頂いたが、本誌ありあけに占める筆者の割合が高まっており、多くの方からの多様な意見が掲載されることを願って、一端、今回の寄稿で一区切りとし、これまでの提言を元に建設的な議論がなされ佐大の魅力UPに繋がる事例が一つでも多く実現していくことを期待したい。

寄稿の機会を与えて頂いた本誌編集委員会、理事会、及び読者の方々にこの場を借りて御礼を申し上げます。有難うございました。

会員の情報

（博士号 取得）

牧角（まきずみ）　啓一（けいいち）さん（S55年卒・植物病理学）

①細胞培養技術を用いたインフルエンザワクチンの研究
②博士（理学）
③熊本大学大学院自然科学研究科
④化学合成液体培地で浮遊増殖する細胞の作成に成功した。更に、鶏受精卵（現行法）よりこの細胞がインフルエンザワクチン製造に適していることを実証した。
⑤一般財団法人　化学及血清療法研究所

①学位論文名　②取得学位
③学位授与大学名　④学位論文の概要
⑤現勤務先

思い出のアルバム

佐大農学部は、現在の本庄地区に移転する前は、赤松町の旧佐賀成美高等女学校跡（現佐賀西高校の東隣）にあった。上の写真は、昭和40年３月卒業記念に、育種学研究室の山川教授、岸川助教授とともに、赤松キャンパスで撮った。

古川　辰馬（S40年卒・育種）

支部だより

佐賀県支部の総会

佐賀県支部は、佐賀県内に在住し、他の支部に所属していない方々を対象に平成20年２月１日に発足しました。今年度平成22年は５月22日に佐賀市の「グランデはがくれ」で、来賓として農学部同窓会　松尾正紀会長（43・農学・育種）はじめ、顧問の佐賀大学名誉教授　高木胖先生（36・農学・育種）、同じく田中欽二先生（39・農学・保護）、現会員85名のうち、27名の参加でした。

総会に先立ち、佐賀大学大学院農学研究科に設置された農業技術経営管理学コース（農業版 MOT）の概要について、内海修一（47・農学・農経）特任准教授の話を拝聴しました。総会では物故者５名への黙祷、江原忠彰（32・農学・園芸）支部長から加々良光彦（37・農学・農土）支部長などへの役員改選を行い、その後約２時間の懇親会で終了しました。

なお、本支部発足の日も浅く、未加入の同窓生も多いことから、本支部の周知に努めたいと思っています。

村岡　　実（Ｓ46年卒・農学・保護）

佐賀県庁支部の総会開催

佐賀県庁支部では、９月２日に佐賀市内「若楠会館」において、会員44名が参加し、平成22年度の総会を開きました。総会では、福島末行支部長（S50年卒・果樹）の挨拶のあと、H21年度の事業実績やH22年度の事業計画などの協議を行いました。

今回は２年毎の役員改選期にあたり、支部長のバトンを森田　昭(S52年卒・農経）が受け取りました。他の役員と一体となって、総会や先輩を送る会への参加者を増やし、会員相互の親睦交流を更に深めていきたいと思っています。

また、来賓として、農学部同窓会の金丸安隆会長（Ｓ43年卒・畜産）にご出席いただき、「教員時代に県農業大学校に出向していたが、県庁支部の結束の強さを痛感した」との心強いお言葉をいただきました。

今年４月に入庁した石丸晃成さん（藤津普及）、秀島瑠満子さん（農試センター）、竹下大樹（果樹試）の３名が入会し、しっかりした口調で自己紹介をされました。

現時点での、佐賀県庁支部の会員数は、219名です。

懇親会の中では、ビンゴゲームを行い、「リーチ・リーチ」のかけ声とともに大いに盛り上がるなど、楽しいひとときを過ごしました。

佐賀県庁支部長　森田　　昭（Ｓ52年卒・農経）

佐賀県教職員支部の臨時支部総会開催について

佐賀県教職員支部の臨時支部総会を10月30日㈯、佐賀市の「ホテルマリターレ創世佐賀」において開催しました。

当日は会員24名が参加しました。また、来賓として、農学部同窓会の金丸安隆会長（元唐津南高校校長）にご出席いただき農学部同窓会の近況等についてお話をいただきました。その中で、６月に開催している農学部同窓会の総会を活性化するためにも、教職員支部からは出来るだけ多く参加して欲しいとの呼びかけがありました。

議事は、会則の改正と役員承認でした。現在、教職員支部の定期総会は規約上５月の開催となってい

ますが、この時期は６月上旬の高校総体前で土日は練習試合が最盛期のため開催が難しいとの意見があり、今回臨時支部総会を開催し定期総会の時期等の変更を盛り込んだ会則改正を行いました。また、近年の農学部卒業生は農業高校の教職員よりも、中・高校の生物等の教職員に多くなっている実態があることから、副支部長の１名を農業高校以外の教職員とするとしました。

臨時支部総会に引き続き開催した懇親会も和やかに開催することができました。参加いただいた金丸会長並びに会員のみなさまありがとうございました。

佐賀県教職員支部　幹事長　大坪　正幸（Ｓ59年卒・農経）

熊本県庁支部

熊本県庁佐賀大学農学部同窓会の平成22年度通常総会を６月18日に熊本市内の「和食の仲むら」で開催しました。当日は同窓会本部から来賓として光富先生のご臨席を得、大学の近況等を織り交ぜてご挨拶を頂戴いたしました。

会計報告や監査報告等の後、３月末で退職された元会長山本秋夫先輩（S48年卒・農業土木）の激励会を兼ねて懇親会が開催されました。会員は現職47名、OB17名の合計64名ですが、当日は勤務地が遠隔地であるなど出席が困難な会員もおられる中32名もの出席がありました。本年は事務局の坂本豊房君（H10年卒・細胞）が「毎年同じ場所も覚えやすくて良いが、たまには特徴のあるお店で新鮮味を出しつつ、若手や女性会員の参加を募ろう」と場所の設定や価格交渉に頑張ってくれました。一年あるいは数年ぶりに会う仲間達と近況を語り合い、美味しい料理を堪能し、最後にはグラス片手にあちこちに輪が出来、用意した焼酎も飲み干すほどにぎやかに会は進みました。

文責　大田黒　慎一（Ｓ50年卒・園芸）

左：元会長 山本秋夫先輩（Ｓ48年卒・干拓）
右：川口晶子さん（H18年卒・熱作）

73A 農園会

第３回同窓会を熊本市で開催

1973年（昭和48年）４月に農学科・園芸学科に入学した学生による「73A 農園会」の第３回同窓会を去る10月23日に熊本市（熊本城近く）の郷土料理店「一水」で開催。参加者は、24名（農学科：８名、園芸学科；14名、特別参加；当時、熊本県からの派遣研修生２名）で、遠くは、千葉県から駆けつけてくれました。

同窓会では、物故者への黙祷後、幹事を代表して高木由美さんが歓迎の挨拶を行い、続いて、佐賀大学農学部の近況を同窓生で佐賀大学農学部教授である有馬　進さん（農学科）が報告。乾杯後は、熊本の郷土料理に舌鼓を打ちながら、同窓会に初めて、又は毎回参加した人など久しぶりの再会に話も盛り上がり、楽しいひと時を過ごしました。

次回は長崎県が当番。長崎在住の寺島正彦さん（農学科）が開催に向けた決意表明を行い、参加者全員が２年後の2012年に長崎での再会を約束し、お開き。

その後は、ほとんどが二次会に向かい熊本の夜を満喫したようです。

今回の幹事は、熊本県在住の高松孝行（農学科）、岡崎末寿・金子　淳・高木由美・橋口敏光（園芸学科）でした。

高松　孝行（S52年卒・農学科作物学）

東京支部

11月18日に東京支部総会が八重洲富士屋ホテルで開催された。会員の参加者は55名、同窓会からは宮島会長ほか各学部の会長も全て参加した。

いやはや、皆さん元気元気、出席者の会員の中での最高齢者は喜寿を迎えられている。戦後の経済成長と共に佐大を卒業後大都市で頑張ってこられた先輩方だ。

祝宴最後に巻頭言と学生歌に合わせた踊り…若き血潮の…いやいや脱帽です。いつまでもお元気で

現農学部同窓会・会長　金丸　安隆（S43年卒・農学・畜産）

豊後はがくれ会（大分支部）

紅葉の美しい時期に（11月13日）、大分市内のホテルにて宮島同窓会会長をはじめ４名の副会長と支部会員30名の参加をもって支部総会と懇親会がおこなわれた。来年度も役員留任となった（牧野、清末、島田）。

美味しい料理と酒が進むと、どのテーブルも近況報告と昔話に盛り上がり、わいわいがやがや。会場は笑顔で一杯。参加者全員の記念写真をプロにお願いしたので、送付に間に合わなかった。写真は走査電子顕微鏡でとった日本で最も小さいハッチョウトンボの顔です。笑顔に溢れた表情だ。このトンボは大分の各地で生息し、大分の自然環境が素晴らしいことを物語っている。

今年度、会員の親睦をはかるために、無垢島（津久見市、椿の島）のんびり一泊の旅やゴルフコンペを行った。さて、来年度は何か楽しいイベントをと思っている。花見（桃、桜、梨、チューリップなど）、温泉、島巡り、食（フグ、関アジ、関サバ、マグロ、ハモ、姫ダコなど）、ゴルフ、ハイキング、テニス等の企画がありましたら、役員までお知らせ下さい。

支部長　島田　達生（S42年卒・農学・植物保護）

◆編集後記

今年度の役員改選で新たな編集委員によって、会報第７号「ありあけ」を発行することが出来ました。玉稿を賜りました方々にお礼申し上げます。特に、平山伸（昭和60年・農芸化学）氏には、これまで５回にわたり「佐大への提言」を寄稿して頂き、ありがとうございました。今回でひとまず完了となります。

会報は農学部同窓生約6,500名を結び繋ぐ情報誌です。今後は、出来るだけ多くの方々の近況や在学当時の写真「思い出のアルバム」を掲載していく方針です。

各位の近況、各支部の集い、また本同窓会へのご意見など、事務局までお知らせくださるようお願いいたします。次号は平成23年６月１日の発行予定です。